

玉井 敬之 (たまい たかゆき)

昭和4年 大阪に生れる

昭和27年 関西大学卒業

現 在 同志社大学文学部助教授

現 住 所 奈良市疋田町2—6—21

昭和51年10月1日 印刷
昭和51年10月5日 発行

夏目漱石論

著 者 玉 井 敬 之

発行者 及 川 篤 二

印刷所 第一印刷所

篠原鉄郎

101 東京都千代田区猿樂町二八—一三

(株)桜楓社

〇三 二九—五六六一

振替東京 六一八〇二〇

検印省略

夏目漱石論

玉井敬之著

目次

I

『吾輩は猫である』の一人物——迷亭の肖像——	7
『草枕』の一面	16
『野分』成立の側面	34
『虞美人草』小論	48
『坑夫』論	59
『彼岸過迄』論——空想から現実へ——	82
『こゝろ』をめぐる	103
「私の個人主義」前後——『こゝろ』から『道草』へ——	125

II

瓜実顔の女——その二つの顔——	145
-----------------	-----

漱石における愛の世界像	159
法蔵院時代の漱石私註	168
夏目漱石論——明治型知識人の問題——	188

III

漱石研究史論	209
戦後における漱石・私記——その青春期をめぐって——	229
参考文献目録	241
あとがき	253
収載論文一覧	255

I

『吾輩は猫である』の一人物

——迷亭の肖像——

一

迷亭とはいかなる人物か。いうまでもなく親愛なる中学教師珍野苦沙弥先生の友人であり、博学多識の美学者である。『吾輩は猫である』のなかにあつては、苦沙弥先生に次いで重要な役割をになつていて、第一章から第十一章のうち、第七・第八章を除いて各章にその飄然たる言行をもつて登場してくる。苦沙弥先生との關係は、「人の家も自分の家も同じものと心得て居るのか案内も乞はず、づか／＼上つてくる、のみならず時には勝手口から飄然と舞ひ込む事もある」（第三）といわれるほどのものであり、さらに先生の外出中は、その細君と話こんでいるほどの間柄でもある。親友ないし「悪友」といつてもいいであらう。

迷亭なる人物の魅力は、ひとことでいえば、そのベダントリにある。ひとたび彼と対したならば、その博学多識に完全に眩惑され、彼に抱く多少の不安と不信は巧みな話術にきれいに拭い去られて、知らぬ間にそのペースにはまりこみ、彼の法螺を信じてしまっているのである。この小説の冒頭で、苦沙弥先生は迷亭にアンドレア・デル・サルトのことで騙され（第一）、越智東風君はトチメンボーなる料理のことで迷亭のベダントリを信じ、あまつさえそれと知らずして迷亭とともに西洋料理屋のボーイをたぶらかすのである（第二）。人の好い苦沙弥先生や越智東風

君だけでなく、高慢な実業家夫人金田鼻子も迷亭の口から出まかせの「伯父牧山男爵」に、まんまとひっかかるのだ(第三)。その口ぶりが、東風君にいわすと「えゝ全く妙なのですが、先生が余り真面目なものですから、つい気がつきませんでした」(第二)というようなくあいにして、やられてしまうのだ。ことに金田夫人をたぶらかしたときなどは、アンドレア・デル・サルトですでに経験済みの苦沙弥先生でさえもが、

「それでも君は、さつきの女に牧山男爵と云つた様だぜ」「さう仰つしやいましたよ、私も茶の間で聞いて居りました」と細君も是丈は主人の意見に同意する。「さうでしたかなアハ、、、」と迷亭は訳もなく笑ふ。「そりや嘘ですよ。僕に男爵の伯父がありや、今頃は局長位になつて居まさあ」と平気なものである。「何か変だと思つた」と主人は嬉しさうな、心配さうな顔付をする。「あらまあ、能く真面目であんな嘘が付けますねえ。あなたも余つ程法螺が御上手で居らつしやる事」と細君は非常に感心する。(第三)

と、またもや、いっぱいくわされているのである。

要するに迷亭が、ひとたびあらわれるや、いっさいは彼の話術に席捲され、翻弄されて、その席での話題は攪乱され、方向がさだまらなくなり、次から次へと飛去り飛来り、とどまるところを知らなくなる。「先生(迷亭)は猿轡でも嵌められないうちは到底黙つて居る事が出来ぬ性」(第六)とも、「迷亭君が一人這入ると肝心の話はどつかへ飛んで行つて仕舞ふ」(第十一)とも、「吾輩」によつていわれているのである。この迷亭の饒舌の最大の被害者は、珍野苦沙弥先生であった。

『吾輩は猫である』において、珍野苦沙弥と迷亭とはきわだったコントラストをなしているのである。迷亭は著しく積極的、攻撃的であり、苦沙弥はそれに反して消極的、防禦的であつて、このコントラストを通して、「吾輩」により二人は諷刺の対象にされるのだ。

おそらく、苦沙弥と迷亭とのコントラストは、夏目鏡子が「迷亭などといふ人物は誰をモデルにしたものか私には見当はつきませんが、大方、自分のもつて居る性格を、あのものぐさなむつり屋の変人苦沙弥と、軽口屋の江戸つ児迷亭とに二つにわけて書いたものでありましょう」（『漱石の思ひ出』）と回想しているとおりであろう。だとすれば、『吾輩は猫である』において、迷亭のしめている位置は、なかなか重要なものであったということになる。

二

では、『吾輩は猫である』という小説で、この重要な人物がどのようにして登場してくるか。迷亭の「首懸の松」での不思議な経験（第二）や、薬罐頭の女への失恋（第六）などは、「人間を不可解とみる体験」や「感応」が基調としてあったとしても、やはり滑稽といわれてもしかたのないものであった。この滑稽な経験の持主、「うん迷亭か、あれは池に浮いてる金魚鉢の様にふわ／＼してゐるね」（第八）と哲学者八木独仙君によって評されているこの人物の、最初のこの舞台への登場は、そんなに陽気なものではなかったといえる。つまり「吾輩」の主人が、書斎で絵を書いているころ、「ある日其友人で美学とかをやつて居る人が来た時に下の様な話をして居るのを聞いた」というように、さりげなく登場してくるのである。

「どうも甘くかけないものだね。人を見ると何でもない様だが自ら筆をとつて見ると今更の様に六づかしく感ずる」是は主人の述懐である。成程詐りのない処だ。彼の友は金縁の眼鏡越しに主人の顔を見ながら、「さう初めから上手にはかけないさ、第一室内の想像許りで画がかける訳のものではない。昔し以太利の大家アンドレア、デル、サルトが言つた事がある。画をかくなら何でも自然其物を写せ。天に星辰あり。地に露華あり。

飛ぶに禽あり。走るに獸あり。池に金魚あり。枯木に寒鴉あり。自然は是一幅の大活画なりと。どうだ君も画らしい画をかゝうと思ふならちと写生をしたら」

「へえアンドレア、デル、サルトがそんな事をいつた事があるかい。ちつとも知らなかった。成程こりや尤もだ。実に其通りだ」と主人は無暗に感心して居る。金縁の裏には嘲ける様な笑が見えた。(第二)

迷亭の最初の登場のしかたは、このようなものであつた。そうしてまだここでは迷亭という人物の性格をそのままあらわしたような名はつけられていない。むしろ「金縁の裏には嘲ける様な笑が見えた」という表現は、ある種の底意地の悪さを思わせるものがあり、後に笑いの対象ともなるべき人物の、最初の紹介としては、あまり適切であるとはいえないだろう。少なくとも、この段階では、迷亭を主人と同じように諷刺的人物として造型するより、より多く猫のがわにあつて猫とともに主人を攻撃し、その弱点を暴露することに、主眼はおかれていたように思われるのである。

迷亭がこんなかたちで登場する『吾輩は猫である』の第一章は、「ホトトギス」同人の山会での朗読のために書かれたもので、これだけで単独の完結した作品でもあつた。高浜虚子のすすめにより、「ホトトギス」明治三十八年一月号に発表され、好評のあまり続編が書きつがれていったことなどは、いまさらいうまでもない歴史的事実であらう。

山会での朗読のために書かれた第一章は、ある中学教師の無能な生活を、猫の眼を通して暴露することにあつたとしても、まだ迷亭を苦沙弥とのコントラストを通して諷刺の対象となるべき人物として、明確に設定するつもりはなかったかもしれない。苦沙弥についても同様のことがいえるだろう。『猫』第一章が、山会という写生文を朗読する会で、朗読されたということを考えれば、制作者の意識に、朗読会が大きく作用したことは否定できないと

思われる。第一章には、どの登場人物に対しても、「吾輩」の主人にさえも、その固有の名は、まだつけられていないのである。なお『吾輩は猫である』が書かれていく機微については、内田道雄氏に精緻な論説『『浮城集』の問題』がある。このなかで内田氏は、『猫』(第一)への、『ホトトギス』的制肘は無視し難い程大きいと云わねばならぬだろう」と指摘しているが、傾聴すべきであらう。

ここまでのところ、『猫』(第一)は、諧謔化はされていても、まだ諷刺の対象となるべき人物は、創造されていないといわねばならぬ。むしろそれよりも、まだ名前も無い「吾輩」が、「人間と同居して彼等を観察すればする程、彼等は我儘なものだと断言せざるを得ない様になつた」(第二)り、車屋の「黒」をして「一てえ人間程ふてえ奴は世の中に居ねえぜ。人のとつた鼠を皆んな取り上げやがつて交番へ持つて行きあがる。交番じや誰が捕つたか分らねえから其たーんびに五銭宛くれるぢやねえか。うちの亭主なんか己の御蔭でもう沓円五十銭位儲けて居やがる癖に、碌なものを食はせた事もありやしねえ。おい人間てものあ体の善い泥棒だぜ」(第一)といわしめたり、要するに「人間の不徳」についての告発が、そこにはあった。この場合、「吾輩」にしても「黒」にしても人間の被害者であつた。猫は決して人間に優越はしていない。第一章で主人や美学者を、また「吾輩」自身を如何に諧謔化、戯画化してみても、ここからは笑いは生れてこないだろう。そもそも笑いが優越感の表現であることは、すでにこれまでの笑いについての理論が、そのことを証明しているのだ。

三

ともあれ、迷亭は、第二章の中頃近くになつてようやく「前回に紹介した美学者迷亭君」とはなはだ親しげな呼ばれ方で登場してくる。第一章では「友人で美学とかをやつて居る人」は紹介されていても、迷亭君は紹介されて

いなかったのであるが、第二章では、迷亭はすでに自明の存在として扱われている。いずれにしても第一章と第二章との間には、迷亭の人物像に明らかな断絶があるようにみえる。美学者が迷亭であることが明らかになったように、親愛なる「吾輩」の主人も、この第二章ではじめて苦沙弥というその名にふさわしい人物であることが読者に知らされるのである。ここで、苦沙弥先生の「臥龍窟」(第四)に集る越智東風君や水島寒月君などの「太平の逸民」(第二)たちが、ほぼ勢揃いすることになり、この人々たちの饒舌と行為が、「吾輩」によって報知され、笑いの対象になっていくのである。

しかし、『吾輩は猫である』は、諸人物の性格が複雑にからみあい、漱石の言葉をかりれば、「是非共篇中の人物の方が自由意志に従つて、自分で纏まつた筋を構成する様に働らいて行かなければならない。さうすると其小説の統一は作者の作つた統一でなくつて、篇中人物の作つた統一になる。だから有機的になる」(『文学評論』第六編)というような長篇小説ではなく、「趣向もなく、構造もなく、尾頭の心元なき海鼠のやうな文章」(『猫』上篇序)であった。そうであるかぎり、『猫』に登場する諸人物は、猫ないし作者が気儘に造型するのであって、そこにある種の断絶があったとしても、諸人物の性格は、それにふさわしい名をつけられたとき、運命的に決定してしまつていたといえる。状況が変ることによって、あらたな性格が開示されることはなかったのである。

世俗的人物は、常に世俗や金銭に拘泥し、そこから離れることなく、逆に「太平の逸民」たちは、最後まで世俗と世俗的人物を嘲笑している。この小説は逸民たちのディレッタントな会話と世俗的人物たちとの常に繰返される衝突に、その面白味があった。「臥龍窟」に集る常連が世俗を、また金田夫妻等が苦沙弥や迷亭を、おたがいに輕蔑し無視すればする程、ベルグソンのいう「他人と触れ合ふことを心懸けないで自分の道を自動的に辿つて行く人物」になり、二つのタイプの「社会生活に対するこわばり」⁽³⁾が、われわれの笑いを誘つていくことになるのだ。

しかし、このなかにあって迷亭は、この二つのタイプに対して、多少とも異なった存在であったように思われる。「吾輩」からみれば、もとよりここに登場する諸人物と同じように笑われるべき人物であるが、時には苦沙弥とともにありながら、苦沙弥を攻撃し、批判する立場におかれている。これは苦沙弥と迷亭が、ともに漱石のある部分の戯画であることにもよるのだろうが、しかしなお、もう少し複雑なものが、そこにはありはしなかったか。

この小説の終りに近く、「臥龍窟」に例のごとく常連が集ったとき、迷亭は現代文明の批判から独自の「未来記」を、「人間全体の運命に関する社会的現象」として展開する。それは個性の主張によって、将来においては結婚が不可能になるという結論であった。

「……夫は飽迄も夫で妻はどうしたつて妻だからね。其妻が女学校で行燈袴あんどんばかまを穿いて牢乎たる個性を鍛え上げて、束髪姿で乗り込んでくるんだから、とても夫の思ふ通りになる訳がない。又夫の思ひ通りになる様な妻なら妻ぢやない人形だからね。賢夫人になればなる程個性は凄^い程発達する。発達すればする程夫と合はなくなる。合はなければ自然の勢いきまじ夫と衝突する。だから賢妻と名がつく以上は朝から晩迄夫と衝突して居る。まことに結構な事だが、賢妻を迎へれば迎へる程双方共苦しみの程度が増してくる。水と油の様に夫婦の間には截然たるしきりがあつて、それも落ちついて、しきりが水平線を保つて居ればまだしもだが、水と油が双方から働らきかけるのだから家のなかは大地震の様に上がつたり下がつたりする。是に於て夫婦雑居は御互の損だと云ふ事が次第に人間に分つて来る。……」

として、さらに次のようにいう。

「明治の御代に生れて幸さ。僕などは未来記を作る丈あつて、頭脳が時勢より一二歩づゝ前へ出て居るからちやんと今から独身で居るんだよ。人は失恋の結果だ忤と騒ぐが、近眼者の視る所は実に憐れな程浅薄なものだ。

……」(第十一)

この個性こそ、近代がアンシャン・レデームから解放したものであり、個性の主張と、その充実は、近代の輝かしい「旗印」であつたはずである。この旗印は、『猫』の書かれた一九〇〇年初頭の明治後半期においても、まだその有効性は、疑われていなかった。このときにあたつて、迷亭は、まだかなり明るい近代に対して、はなはだペシミスティックな展望をおこなっている。そこには、これまでえがかれてきたような飄逸な風貌や、法螺吹きのおしやべりや、気軽な行動からうけるであろうような印象とは、全く異なつた迷亭がいる。この現代文明へのペシミズムは、漱石にもみられる精神であるが、美学者迷亭に即しているならば、どういふことになるのだろうか。金もあり、時もありながら、なお職をもたず独身で、ディレッタントな知的興味とペダンティックな饒舌で世俗から超然としてゐることは、滔々と流れていく現代文明社会から、主体的に「高等遊民」としての位置を撰択したといえるだろう。おそらくこの線上に、その後の漱石文学の多くの主人公や、日本は「亡びるね」とにやにや笑いながら三四郎にいう広田先生などが、うかびあがつてくるはずである。

さらにこのことは、「若い時聖堂で朱子学か、何かに癡り固まつたものだから、電気燈の下で、恭しくちよん髷を頂いて居るんです、仕方がありません」(第三)と迷亭にいわれている静岡の伯父とむすびつけてみよう。後、その伯父が苦沙弥に「私ももとはこちらに屋敷も在つて、永らく御膝元でくらしたのですが、瓦解の折にあちらへ参つてから頓と出てこんのぞな」(第九)というように、幕府の大政奉還後、徳川宗家の静岡転封に従つて下つた旧幕臣であつた。迷亭の世俗への態度、独身主義、現代文明のペシミスティックな展望などをならべてみると、ちよん髷姿で静岡に隠栖している伯父とは、血族関係をこえて、その精神の位相においても意外に近いといえるのではないだろうか。おそらく、東京に代表される俗悪な文明開化、物質万能の現代文明に背を見せ、田舎漢の薩長政府に

は、野にあって対していた旧幕知識人の系譜に、迷亭は、その出自と精神においてつながっていた。

この迷亭にしてはじめて、笑われるべき運命にありながら、珍野苦沙弥の「臥龍窟」に集る「太平の逸民」たちを、笑うべき存在に化することができる道化役が演じられたのである。迷亭の夫婦別居論、独身主義には、『猫』が書かれたころの、漱石の惨憺たる家庭生活についての絶望や願望がこめられていたであろう。「吾輩」は、より多く迷亭に親近感をいだいていたと思われるのである。

(1) 瀬沼茂樹『夏目漱石』一〇一頁(東大出版 昭三七・三)

(2) 内田道雄『漾虚集』の問題」(『文学』昭四一・七)

(3) 林達夫訳『笑』二三三頁(岩波文庫)